
第2章 なぜ生涯学習なのでしょう



1. 生涯学習は市民が生み出したもの

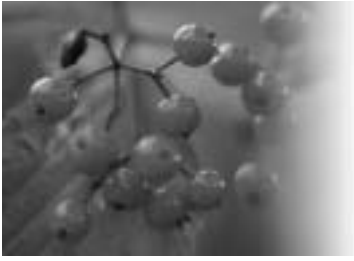
「生涯学習」は、昭和40年代から世界の多くの国で重視され、取り組まれるようになりました。以来、政策として「市民の生涯にわたる自主的な学習活動」を育て、支援し、さかんにしようという方向が明確になりました。

こうした時代の思想をふまえて、松本市の生涯学習推進事業もスタートしました。

この場合、はっきり認識しておかなければならないことが一つあります。それは、こうした新しい事業にあわせて、これまでなかった市民の生涯学習が新しくはじまったのではなく、むしろ、いつの時代にも脈々と生きてきた多くの市民の生涯にわたる学習活動 - 実質的な生涯学習の伝統と実践をふまえ、これをますますさかんにするために、より新しい視点で、より体系的な施策をととのえようとする仕事、それが生涯学習推進事業の土台だということです。

つまり、どのようなきびしい時代・困難な環境のなかにあっても、学び、伸びようとする市民の意欲があったということです。そして、この市民の自主的な学習への熱意こそ、市の取り組む生涯学習推進事業の根幹となるものです。

このように、生涯学習は、いま突然あらわれたものではありません。むしろ、久しい世代にわたり無数の市民が続けてきたさまざまな学習・精進・研究・研さんなどの活動の成果を評価し、今後、そのような活動が、市民一人ひとりの向上や生きがいのためにも、また、「生きていくために必要な道具としての学習活動」「平和で生きていくために欠くことのできない学習活動」としてますます大切であるという認識に立って、あらためて、そのような多様な学習活動を「生涯学習」として位置づけ、より発展させようとしているわけです。



2. 生涯学習を生き育てる新しい環境

私たち市民は、自分を伸ばそう、深めようとする要求があり、それが、いつの時代にもそれぞれの時代の生涯学習を支えてきました。

さらに21世紀を迎え、生涯学習をより容易にする新しい環境も生まれてきました。そのいくつかをあげてみましょう。

(1) 生活が豊かになったこと

私たちの暮らしが、おかねもモノも豊かになってきました。市民所得が伸び、農作業をはじめ労働条件も機械化・省力化がすすみ日々の生活に時間のゆとりをもたらしています。活字メディア・映像メディアなど文化や生活情報とのふれあひも日常的となっています。

(2) 時間に恵まれるようになったこと

長寿社会になって何より人生そのものが長くなりました。少子化がすすみ子育ての時間も短くなっています。週休2日制・労働時間の短縮などで余暇も増えています。健康管理がすすみ定年後・老後も健康な時間もてるようになりました。

(3) ふれあひの機会が増えていること

交通網・情報網が高度化しています。松本市・松本平という従来の暮らしのエリアから全県・全国・ときには世界とのネットワークも可能になっています。芸術や文化や技術の交流、学ぶ仲間の情報交換、放送利用による学習機会の充実などが容易になりました。また、急速な国際化の進展も新しい交流を生む大きな要素になっています。

(4) 市民が共通に関心をもつ新しい学習テーマが増えていること

地球環境・福祉・人権・平和・消費生活・身近な地域の課題などみんなが共通の関心をもちやすい問題が多くなっていること、急速なIT社会の進展にもなって技能習得の機会が求められていること-など、学習ニーズに新しい要素が増えています。

(5) 地域課題の解決に学びの力を生かす流れが芽ばえてきたこと

生活を取り巻く社会環境が大きく変化していることにより、人々の意識や考え方も大きく変わり、地域のあり方、生活の課題に対する考え方も多様化してきています。特に人と人とのつながりと地域の連帯意識の希薄は、少子・高齢社会の進展のなかで社会生活全般の営みに大きな影響を及ぼしています。生涯学習が「生きがいの創造」から「地域課題を学び」成果を地域づくりへ生かしていく学びとなるよう生涯学習の位置付けも変わってきています。

このように、暮らしと時間のゆとりがあり、暮らしとともに心を豊かにしようという要求が強まる一方で、社会のひずみによる弊害が社会生活を脅かしていることから、生涯学習がその課題解決の力となることへの期待が一層高まっています。